
まっさんが幻想入りシリーズ～紅魔館の咲夜さんが風邪引いた～

ソースケ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まつさんが幻想入りシリーズ～紅魔館の咲夜さんが風邪引いた～

【Zコード】

Z7971F

【作者名】 ソースケ

【あらすじ】

最近、あなたらしからぬ仕事上のミスが多い、とレミリアに怒られる咲夜。咲夜としては恐縮して、頭を下げるしかない。お小言ついでに、咲夜はレミリアから里に行つて屋敷で使つている暖房用のまきを買つてくるように命じられる。今日も平和な幻想郷では男たちが仕事の息抜きに将棋を指していた。もちろん、そこにはまっさんの姿も。そんなところへまきを山ほど背負つた咲夜が通りかかる。周りの男たちは気づいていないようだが、ちょっと咲夜ちゃん様子がおかしい・・・。気になつたまつさんは、咲夜のあとを追いかけ

τ
•
•
•◦

紅魔館の咲夜さんが風邪引いた・第一話（前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。
ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人はお読みにならないほう
うがよろしいかと思います。

小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観につ
いての誹謗中傷は「遠慮ください」とお願いします。

あと、本作品は『紅魔館のメイドの休日』をお読みになつてから読
んでいただくと、多少面白さがアップするかもしれませんので、よ
ろしくお願いします。

紅魔館の咲夜さんが風邪引いた・第一話

「咲夜！」

一度の呼び付けで返事のないことにいたったレミリアは、語氣を強めて従者を呼んだ。

「あ・・・はい。お呼びですか、お嬢様」
レミリアの部屋を清掃中の咲夜が、その大きな声にあたふたしながら彼女のほうに顔を向ける。

「さっきも呼んだわよ。まったく、呼んだら一度で返事なさい」「・・・はい、申し訳ありませんでした・・・。何か御用ですか？」「もうそろそろ暖炉に放り込む薪がない、って妖精メイドが言つていたわ。切らせたら大変だから、今日中に買つてきておきなさい。それからついでに・・・」

レミリアは咲夜にこまごました買い物を言いつける。
「分かったわね？あと、最近あなたしからぬミスが多いわよ。お皿を割つたり掃除するところ忘れていたり、料理で塩と砂糖と間違えたり。気をつけて仕事なさい」

レミリアは仕事に関して、結構厳しい主人であるようだった。
従者の咲夜がそれに反論できるわけもない。

「は、恐縮です。以後気をつけます・・・」

咲夜は青い顔をしながら、レミリアに頭を下げる。

「ぎょえー！それで詰みなのかー」

「そーなのだー。あたいつてば最強ね！」

職人風の男一人が、軽口を飛ばしながら将棋を指している。

「いや、最強はいいすぎる。つてか、どこのチルノだよそれ。まあ、あんたの将棋は俺から言わせればマルキューだけどな」と、観戦していたまつさんがこれまた軽口を飛ばす。
「そりや、まつさんと比べるとなあ」

「まつさんはそれこそ、幻想郷最強だろ」

「サイキヨーって響きには抵抗があるが、少なくとも、あんたたち
よりは強いわな」

おだてられているのに、なぜか困ったような笑いを浮かべてまつさ
んが言ひ。

「まつたく、ちよつとは謙遜すればいいものを。まあ、負かされる
方はなに言われても仕方ないわな」

はつはつはつ！と響く男たちの元気な笑い声。

午後のハツ時、男たちがお茶どころに集つて、仕事の休憩中に将棋
を指して息抜きしているようだつた。

わいわいがやがや、軽口を飛ばしたり飛ばされたり。
実際に楽しそうだ。

外の世界では失われた縁台将棋が、ここ幻想郷では生きていた。

「お、咲夜ちゃんだ」

道の向こうから、メイド服の咲夜が重そうな荷物を背負つてふらふ
ら歩いてくる。

あれは大量の薪だらうか。

薪を大量に背負つて歩いている咲夜は、まるで一富金次郎のようにな
見えた。

「おーい、咲夜ちゃん！」んにちわ～」

まつさんが気軽に咲夜に声をかける。

まつさんと咲夜は棋友なのだ。

「あ・・・ああ。こんにちわ」

どことなく、元気のない挨拶を送る咲夜。

「買い物かい？そんなにたくさん」

「ええ・・・。お屋敷の暖房に使つてる薪が切れそうでね。買出し
に来たの・・・」

「・・・？そうかい。手伝おうか？」

「つうん。これぐらいならいつも運んでるから、大丈夫・・・」

「まあ、大量の買出しをいつもこなしているのは知ってるけどよ。

ちよつと休んでいくかい？お茶ぐらこおじるぜ」

「いえ。今日はいろいろ忙しいから、これで失礼するわ・・・」

「そつか、気をつけて帰りなよ」

「ええ・・・」

生返事だけを返して、咲夜はその場を去つていった。

「うーん・・・」

駒を落として将棋を指していくまつさんは、中盤の一一番難しい局面でうなり声を上げた。

「ははは。やすがのまつさんもこの局面は考えどい、つてといふかい？」

「あ、いや」

外の世界ではプロの将棋指しを手指していた彼である。

一枚落ちの上手をもつて考えることなどほとんどない。

「ちよつと、咲夜ちゃんが気になつてな」

「十六夜咲夜がどうかしたのか？」

「なんか、体調悪そうじやなかつたか？」

まつさんのその言葉に、周りの男たちが苦笑いを浮かべる。

「まつさんはまだ、幻想郷に来て一年ほどだから知らないだひつけど」

「十六夜咲夜は『紅い悪魔』なんて呼ばれている吸血鬼のレミコア・スカーレットの従者でな。普通の人間じゃないんだよ」

「そつそつ、あまりの能力の高さに『完全で瀟洒な従者』なんて二つ名があるぐらこむ。そんな十六夜咲夜が体がどうこう、なるわけないだろ。さつきだつて全然元気そうだつたじやないか

「元気そうだつたか？」

怪訝な顔をするまつさん。

「俺にはいつも十六夜咲夜に見えたぜ」

「そつだな、いつもの瀟洒な雰囲気だつたな」

将棋を観戦しながら、口々にそういう男たち。

「うん・・・」

そうだろうか。

俺には咲夜ちゃんはどうも、体調が悪そりで見えたのだが。

まつさんは、人の状態を見るのには自信があった。

こいつは今、この局面に自信を持つていいのか。

それとも自信を持つていかないのか。

疲れているのか、体調が良くないのか。

外の世界で真剣に将棋を指していたときは、絶えず対局相手を観察し、そのようなことを推し量りながら指していた。

相手の体調が悪そりだつたら、疲れきつて、頭の回転速度が落ちているところに、前もつて用意していた強烈な勝負手を放つ。

卑怯なのではない。

それが全力を尽くして相手と戦うことなのだと、まつさんはかたくなに信じて将棋を指していた。

そりやつてでも得なればいけない由理がある、と信じきっていた。

「俺、やつぱり咲夜ちゃん気になるから、ちょっと見てくるわ

「あ～？ちょっと待てよ。俺のほうがいいのに

「分かった、今回は負けでいい。負けました」

まつさんは対局相手に頭を下げ、わざと駒を投げる。

「え？ あ？ おいつ！」

何か叫んでいる男はもうほうつておくれとして、彼は咲夜が消えていった方向へ駆け足で向かっていった。

「！」

里から出て人気のない紅魔館への道筋でまつさんが目にしたのは、薪を散らかして道のど真ん中で倒れている咲夜だった。

「おい！咲夜ちゃん！おい！！」

あわてて抱きかかえ、大きな声で咲夜の名を呼んでみる。

「う・・・うう・・・はあ・・・はあ・・・」

まつさんの慟哭に咲夜は一応目を開けたが、大きな灰色の瞳はどこかうつろで、吐く息は荒く、意識が朦朧としているようだった。

「すげえ熱だ・・・。40度以上あるんじゃないかな・・・。げ、幻想郷に医者はいないのか・・・」

あわてたまつさんは、とりあえず人里に咲夜をつれて戻ることにした。

まつさんはさつきまで将棋を指していたお茶所に咲夜を負ぶつて連れて行き、まだ将棋に興じていた男たちに盤駒を片付けさせ、縁台の上に彼女を寝かせた。

「とりあえず冷やしたタオルを持つてくれ」

そう指示するまつさんに、男の一人があわてて井戸のほうへ駆けていく。

「あの十六夜咲夜も、体調を崩すんだな・・・」

ぶつ倒れた咲夜を心配そうに、意外そうに咲夜を見つめていた男たちが、そんな感想を漏らす。

「そりやそうだ。どう見ても咲夜ちゃん、ふつーのかわいい女の子だろ」「そんなことは今、どうでもいい。

まつさんの言葉に、一人の男が答えてくれた。
「俺は幸い、幻想郷に来てから元気だったから・・・。幻想郷に医者はいないのか？」

「迷いの森の奥深くに、永遠亭という建物がある。そこに八意永琳っていう女がいて、医者兼薬屋をやっているんだが・・・」

「迷いの森の永遠亭の八意永琳だな。よし」

それだけ聞くとまつさんは、咲夜をもう一度背負いなおした。

「おい、待てよ。迷いの森に行つても永遠亭にたどり着けるとはかぎらねえぞ。文字通りあそこは人を迷わせる森だからな。妖怪も出るし・・・」

「それでも行かなきゃ しょうがねえだろ！意識がねえんだぞ！」「叫ぶまっさん。

咲夜はうつろな瞳で、はあはあと荒い息をつくのみだった。

「・・・運がよけりや、迷いの森でモンペ姿の少女に出会えるはずだ。そいつなら永遠亭まで迷うことなく案内してくれると思う」「井戸でタオルを冷やして持ってきた男が、まっさんに背負われた咲夜の額に鉢巻を締める要領で冷たいタオルを巻きながら、そう教えてくれた。

「モンペ姿の女の子だな。分かった」

迷いの森の場所は知っている。

まっさんは咲夜を背負い、全速力で駆け出した。

『完全で瀟洒な従者』だと？

咲夜ちゃんが瀟洒なのは認めてもいい。

だが、完全な人間なんて存在するわけがないのだ。

羽生だつて間違えるのに。

「！あの子か！」

なんという僕偉だろう。

迷いの森の入り口で、おにぎりをほおばつている、モンペ姿の一人の少女。

「お～い！」

まっさんの大きな呼び声に、そのモンペ姿の少女は怪訝顔でそちらを向いた。

駆け寄るまっさん。

「食事中すまん。あんたが永遠亭まで案内してくれる女の子か？」

「そしどだが・・・背中にいるのは、十六夜咲夜？」

意外そうにまつさんの背中に背負われている咲夜を見つめる少女。
「知っているのかい。まあ、それはいいや。咲夜ちゃん、病氣で倒れちまつてな。急いで八意永琳たらいう女医がいるところまで案内してくれ」

「・・・分かつた」

少女はおにぎりの最後のひと欠片を口に放り込んで飲み込むと、次の瞬間には迷いの森の中に駆け出していた。

少女の足があまりに速すぎるので、少しペースを落としてもらい（そうでなくともまつさんは傷病者を背負っているのに）、お互い口も聞かぬまま、走りにくい森の中を曲がったりくねつたりしながら、30分も走つただろうか。

大昔の日本の貴族が住んでいたそな古めかしい雰囲気をしていくくせに、まるで新築のように美しい建物が見えてくる。

「あれが永遠亭か」

「そうだ」

ぶつきらぼうに答えるモンペの少女。

無愛想な女の子だな、とまつさんは思う。

まもなく、永遠亭の立派な門の前にたどり着いた。

「ここが永遠亭だ。帰りは兎が案内してくれるだろ？　じゃあな」それだけいようとモンペ少女は、あつという間に森の中へと姿を消してしまった。

「あ、おい！名前ぐらい・・・つていつちました。ここが・・・つていわれても。困ったな。勝手に入つていいのか？」

幸い、門は開け放しのようだが。

しかし、屋敷は結構広そうである。

入つていつて道に迷つた、ではしゃれにならない。

「おーい！誰かいなか！急患なんだが！」

とりあえず叫んでみる。

1分。

2分。

「くそつ！」

もう一度叫ぼうとしたときだった。

建物の中から、誰かやってきたようだ。

「お・・・」

その人物が近づいてきて、シルエットが鮮明になる。

その人物（？）は頭にウサギの耳のようなものを生やしていて、なぜかかちりした女子生徒用のブレザーを来た、制服美少女だった。

「急患？背中にいるのは十六夜咲夜かしら？」

うさみみブレザー美少女が、そう聞いてくる。

「え・・・あ～。そうなんだが。・・・確かにここに八意永琳っていう女医がいて、患者を診てくれるって聞いたんだが」
・・・俺は何か、間違った情報をつかまされたのだろうか。

コスプレ居酒屋に用はないのだが。

そもそも、彼はコスプレにはあまり興味がなかつた。

「そう。」

ウサ耳ブレザー美少女が、先を切つて歩き出す。

大丈夫かいな、と思いつつも、まっさんは彼女についていくしかなかつた。

続く。

紅魔館の咲夜さんが風邪引いた・第一話（後書き）

いつも愛読していただき、まことにありがとうございます。
年の瀬、どうお過いしですか？

今回は以前執筆したＳＳの中でちょくちょく語っていた『まつさん
がレミリアに噛み付く』回のお話です。

前回クリスマスのＳＳを投稿したのですが、みなさん幻想郷の女の子とオリジナルの男の子が仲良くする話はお好きではないようで、アクセスもあまり伸びていませんね・・・（単に何かを外していく、面白くないだけかもしれません）。

別に恋人同士になつたりはしないので、よかつたらぜひ、読んでやつてください。

今年中にもう一本アップできるかな?
どちらにしろ近いうちにこの作品は書き上げたいと思つております
ので、応援よろしくお願ひします。
それでは次回作でお会いしましょう。

この作品は東方プロジェクトの非公式一次創作小説です。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻樂団様：<http://www16.bing.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

シュー一ティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく、言う私も東方が気になつてファミコン以来久しぶりにシュー一ティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になつた方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弾幕型格闘ゲーム（？）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。
こちらもぜひ、プレイしてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7971f/>

まっさんが幻想入りシリーズ～紅魔館の咲夜さんが風邪引いた～
2010年10月12日08時03分発行